

## 【資料紹介】

# 池田英雄著『修学の道場回想録 —七十年前の思い出の糸をたぐりて—』 ～「大東文化学院紛擾」を学生たちはどう見ていたか～

浅沼 薫奈

## 【解題】

本稿は、大東文化学院本科3期生、高等科6期生である池田英雄による『修学の道場回想録 —七十年前の思い出の糸をたぐりて—』（以下、『回想録』）を紹介するものである。紙幅の関係上、本稿では、『回想録』目次及び前半部分にあたる「第一部 大東文化学院在学当時の思い出く七十余年前の回想録」のみを紹介し、後半の「第二部」以降については別途改めて紹介する機会を設けたいと考えている。

『回想録』は、池田英雄が2006（平成18）年当時98歳の頃に手書きで著し本学へ寄稿したもので、自身の学生時代を追憶した思い出の記である。『回想録』を書き終えたとき、数えでは百歳を迎えようかという時期であった。内容としては、大東文化学院での学びの思い出から始まり、「財団法人無窮会東洋文化研究所」での研究生時代、加えて恩師との思い出が綴られており、特に大東文化学院創設期を学生の視点から振り返っていることが特徴である。

池田英雄は、大東文化学院教授をつとめた池田四郎次郎の子として生まれ、親子二代にわたり本学に深く関った人物である。父である池田四郎次郎（1864-1933）は、陽明学を専門とした漢学者であり、大東文化学院創設時より教授を務めた。学問を志して大阪から上京した折に三島中洲（二松学舎創設者）に師事したといい、蘆洲と号した。1926（大正15）年から1928（昭和3）年末頃にかけておきた「大東文化学院紛擾」を期に本学を辞してからは、二松学舎や國學院の教授を歴任した。主要

な著書には『日本詩話叢書』『史記補注』『経解要目』『故事熟語大辞典』等がある。

その息子である英雄は、1908（明治41）年に東京市内にて、父四郎次郎と母しけのもとに第三子として生まれた。1926（大正15）年3月に財団法人日本中学校を卒業し、同年4月に創設3年目であった大東文化学院本科へ入学、同科卒業後は高等科へ進み、計6年間を大東文化学院で過ごした。父の池田四郎次郎は英雄の入学時にはまだ大東文化学院教授であったが、直後に起った大東文化学院紛擾によって、ほどなく離職して二松学舎へと移籍していった。その後、四郎次郎は自動車事故により1933（昭和8）年に逝去している。一方、高等科を卒業した英雄は、吉田増蔵（学軒）の書原撰述所助手となり、また母校であった財団法人日本中学校で漢文科教員として勤めるかたわら、無窮会に設けられた東洋文化研究所研究科（高等科）の一期生となり漢学研究を続けた。主業績としては、父の遺稿であった『史記補注』の完成を目指し校訂を行ったことである。その研究成果は、『史記補注』上編「本紀・成家」（昭和47年）、『史記補注』下編「列伝」（昭和50年）、『史記研究書目解題』（稿本、昭和53年）となって刊行された。

さて、『回想録』のなかの草創期の大東文化学院は、どのように描かれているだろうか。同時期の大東文化協会及び大東文化学院の関係資料は、その後の昭和期の戦火で焼失したこともあり、多くは残されていない。教員や関係者によるものはまばらにあるものの、学生の証言や記録はさらに少ない。そのため『回想録』から見える学院の様子は、学生の視点からの貴重な証言である。教員の顔ぶれ、授業風景や当時の学生生活の様子も記されている。通学時の様子、休講時に古書街へぶらぶらと歩いて行く楽しみ、雨の日の学院内での過ごし方、100年近くを経てもなお具体的で臨場感あふれる文章であり、小規模ならではの学友の繋がりも温かく伝わってくる。

ところで、前述のように、父である四郎次郎は大東文化学院創設時の

教授であり、1926（大正15）年から1928（昭和3）年頃にかけておきた「大東文化学院紛擾」においては「私学派」の中心教員でもあった。英雄はこのときの状況を「痛ましい学院紛争に想う」と記しているが、ここでは父やその動向についてはほとんど言及していない。ただし、続く「第二部 財団法人無窮会東洋文化研究所当時の思い出」中においては、「新設の大東文化学院設立の精神は、平沼先生の無窮会設立の精神と完璧なまでに一致するものであった」（『回想録』40頁）「昭和元年（大正十五年（1926））には平沼先生と志を同じくした教職員一同は、こぞって総辞職された。この折り先考蘆洲もまたその行動を共にした。かくして平沼先生の大東文化学院創設に托した理想の夢は空しく挫折をみることに成った。これら教授を中心とする方々は一致団結し、当時西大久保に在った無窮会に拠って将来への展望をえがき、初志の貫徹を期したのであった。」（『回想録』41-42頁）と記していることから、「私学派」が本来の「正統」であり、その理念は無窮会の研究活動に委ねられていったと英雄が考えていたことが読み取れる。

なお、「無窮会」とは1914（大正4）年より現在まで続く、東洋文化や東洋古典に関する研究を主たる目的とした組織団体であり（現在は公益財団法人）、そもそも国学者井上頼圀の死去後に蔵書（神習文庫）の散逸を防ぐため一括購入し、平沼騏一郎が自宅の一部を提供して所蔵書庫としたことを始まりとしている。一方、「漢学振興運動」を掲げて大隈重信を初代会長とする学術団体「東洋文化学会」が1921（大正10）年に発足すると、その一部が分離独立して「大東文化協会」を創設し、東洋文化学会本体は1943（昭和18）年に「無窮会」へと吸収合併されることとなった。

英雄は私学派教員の多くはこの「無窮会」へ活動の拠点を移したと述べており、以降は大東文化学院とほぼ没交渉であったと考えていた。関係改善がなされた「契機」については、次のように振り返り回顧している。

嘗て大正の終りから昭和の初めにかけて、官・私の両学派には執拗に漂っていた暗雲も、時の流れとともに、いつしか消えうせて、昭和二・三十年代を迎える頃にはようやく明るい日ざしをみるに至った。そして官・私互いの交流も始まったのであった。(中略)「清田清先輩の度量」久しい間、官私の両者間を固く閉ざしていた扉を押し開けて、互いの交流に尽くした最初の方は、その昔、私学派恩師の総辞職に殉じ、決然として中途退学の拳に出た本科生清田清氏その人であった。昭和三十年代当時の清田氏は財団法人無窮会での要職に在ったが、嘗ての自己退学に追い込まれた大東文化大(当時の大東文化学院)の旧怨を自ら払いのけ、請われるままに同校への出講を受諾している。この間の経緯については、自著『ハイティン教育五十年』の中に、さらりと次のように記している。“私は昭和三十一年から大東文化で日文(日本文学科)と、中文(中国文学科)との国語科教職課程を担当した。”(同書 232 頁)と述べている。これは氏が決然として退学した後の二十余年後に当る。嘗て自主退学した母校への回帰には定めし、その心中計り知れぬ想いがあつたにちがいない。然しながら過去のわだかまりを乗り越えて、自ら進んで、両学会の融和発展の為に一身を挺し、両者間疎通への先駆者となった。(「第三部 官・私抗争の雪どけ」冒頭 65～66 頁より)

このように述懐している英雄によれば、後に数十年にわたって官私間にわだかまりが残っていたとしている点は、これまで昭和初年頃にはおさまったとされてきた見解とは異なる視点を提供するものと言えよう。ここで、この学院草創期に起きた「大東文化学院紛擾」について、少し説明を加えておこう。

「大東文化学院紛擾」とはそもそも学院教員の人事問題に端を發したもので、1926(大正 15)年～1928(昭和 3)年にかけて起った事件である。初代総長をつとめた平沼騏一郎が多忙を理由に同職を退くと、後

任として第二代総長に井上哲次郎が着任した。東京帝国大学の哲学科において日本人初の教授を務めた井上哲次郎は、1923（大正12）年3月に同大学を退官すると大東文化学院教授長に就任し、1925（大正14）年4月より大東文化学院総長に着任するや、すぐさま学院改革に乗り出している。哲次郎の提案した「改革案」の内容に、真っ向から反発した「私学派」とされる教員陣の多くは一斉に退職の意向を示し実際に学院を離れていき、代わって東京帝国大学の出身者を中心とした教員の補充がなされたのであった。示された「改革案」は大東文化協会幹部であった大島健一や木下成太郎等と相談して作成されたものであったが、「私学派」の教員たちにとってはまさに寝耳に水であり、教員会議の席で唐突に提案されたことにも憤ったとされる。

では「改革案」とはどういった内容であったか。詳細は残されていないが関係者の記録によれば、①経費の節約を図り且つ事務の分担を正すこと、②教授法に改良を加えること、③教科用書の選択を厳正にすること、の3点が骨子であった。特に、授業法に改良を加えるというのは「輪講」方式から「講義」形式へと変更して授業の速度をあげよという意味であり、教科用書の選択というのは従来の「主要」とされた科目を減らし、使用テキストの選定を改めるとともに、「参考」としていた教養科目を充実させることが提案されたものであった。「私学派」教員たちは、それでは大東文化学院の特性や建学の精神を否定することであるとして反発したのである。

その後、辞職した「私学派」教員たちは、井上哲次郎の著書『我が国体と国民道徳』中に「不敬」と見られる内容があるとの指摘を繰り返し行い、この筆禍事件によって哲次郎は総長職を含む公職すべてを辞職することとなった。いわゆる「井上哲次郎不敬事件」とされる事件で、天皇制イデオロギーの正統解説者であり指導者の頂点の位置にいた哲次郎を一時的にせよ失脚させるものとなった。一方、教員たちの争いに関連して二度にわたって学生たちは「同盟休校」を引きおこし、さらには学

生たちまでもが「私学派」と「官学派」とに分裂して主義主張を繰り返したのであった。その後、1928（昭和3）年12月に大津淳一郎が新総長に就任し、また「官私学ノ大同団結ノ実施」が提唱されたことによって学内は次第に落ち着きを取り戻し、紛擾のさなかで退学処分となった学生や辞職した教員たちも官私問わずに復帰を促された。しかし、他校へと移っていった「私学派」教員も多く、本稿で紹介する『回想録』からは、他の教育機関へと移籍した者たちにとってはその後も長く遺恨が残ったことが伺われる資料となっている。

【解題者注】原稿について、基本的に原文をそのまま掲載しているが、①本文中の明らかな誤字等については適宜修正を加えている。また、ごく一部に旧カナ遣い等が見られたが、現代カナ遣いに整え統一した。一方、敬体と常体との混在使用はそのままとした。②『回想録』後半部分については内容が異なるため本稿では掲載を省略し、引き続き次号以降に掲載を検討するものとした。③なお、本文の末尾には「紛争時（昭和5～6年）私学派学生有志の記念撮影」と題した写真がおかれ11人の青年たちの集合写真が掲載されており、その右上には池田英雄氏本人が写っている。本学通説で昭和5年当時といえば、すでに紛争は沈静化して「学業専心」の状況に学院内は落ち着いたとされているが、「私学派」を名乗る学生たちがいまだ状況改善を求めており争いの火種が学内に燻っていたことが伺われる。④参考文献に、池田英雄『史記学50年一日・中「史記」研究の動向—（1945—95）』（明德出版社、平成7年5月）等がある。⑤「大東文化学院紛擾」についての詳細は、拙稿「井上哲次郎と大東文化学院紛擾—漢学者養成機関における『皇学』論をめぐって—」（『東京大学史紀要』第27号、2009年）参照。

『修学の道場回想録 ―七十年前の思い出の糸をたぐりて―』目次  
第一部 大東文化学院在学当時の思い出 <七十余年前の回想録>

(一) 学窓追憶

- ① なつかしい粗朴な木造校舎
- ② 在学時代の思い出、異色の学級
- ③ 当時の学習規程と学習風景
- ④ 遠路徒歩通学の楽しみ
- ⑤ 当時の学生気風と服装について
- ⑥ 七十余年前を回顧して

(二) 本学の特色と学生募集の状況

- ① 本学院では入学金・授業料は一切とらぬこと
- ② 給費制度の確立
- ③ 卒業後の資格付与
- ④ 学院創立のよろこびと、学生募集状況
- ⑤ 学級編成と教授陣々容

(三) 本学院創設の理由と、暗澹たる当時の世相

- ① 本学設立の理由と、その使命
- ② 暗澹たる当時の世相を省みて

(四) 痛ましい学院紛争に想う

- ① 紛争の発生と、その成り行き
- ② 学院紛争の遠因
- ③ 官私三派の合議による教授陣々容の決定

(五) 重ねて「学院紛争の真因」を探る

- ① 初代総長平沼騏一郎先生突然のご転任のこと

- ②大東文化学院幹事三塩熊太氏の主張
- ③当時の私学派・官学派、両派の先生方のご芳名
  - 私学派学生有志の記念撮影

## 第二部 財団法人無窮会東洋文化研究所当時の思い出

＜六十余年前の回想録＞

### (一) 無窮会の創設と、その活動状況

- ①会の創立者と、その抱負
- ②会を創設した人々と、その信条
- ③無窮会と大東文化学院とは分身同心であること
- ④私学派の人々の退陣後の動静について
- ⑤待望久しかった「無窮会東洋文化研究所」の創立
- ⑥開所当時の教授陣の陣容
- ⑦研究科生採用要項
- ⑧研究科生当時の思い出
- ⑨当時の授業の形態と、思い出の恩師
- ⑩財団法人無窮会八十周年祝賀会席上旧時を追懐して想いを綴る  
 (追記) このプリント製作の経緯について
  - 東洋文化研究所謝恩会の写真(新宿、宝亭にて昭和十六年十一月撮影)

注一 大東文化学院学科課程表

注二 東洋文化研究所講義日割表

## 第三部 官・私抗争の雪どけ

『大東文化大学』と、『無窮会東洋文化研究所』との両所に  
わたってご勤務の方々

- 清田清先輩の度量
- 清田多賀代婦人の人と為りと、無窮会へのご厚意



- 原田種成氏との友好
- 妹尾勇氏との思い出
- 浜氏父子二代にわたってのご交誼に感謝す
- 栗原圭介学兄の立志好学
- 進藤光正学兄に想う
- 進藤英幸氏に想う
- 河村広通氏に想う
- 石井勲氏に想う
- その他の数氏

#### 第四部 恩師片影

- 浜隆一郎（青洲）先生の慈愛
- 川合孝太郎（槃山）先生に師事して
- 川田瑞穂（雪山）先生の恩情
- 竹下幾太郎（陸軍少佐）先生のご指導
- 吉田増蔵（学軒）先生の学殖に想う

◎巻末付載 “私の履歴書” 九十八翁 池田英雄 記

#### 第一部 大東文化学院在学当時の思い出 <七十余年前の回想録>

##### (一) 学窓追憶

##### ① なつかしい素朴な木造校舎

私が入学し始めて通学した九段の校舎は小じんまりとした古いペンキ塗りの木造二階建てであった。校舎に添ってささやかな弓道場がある他には、別に校庭も運動場もなかった。従って運動場と云うものは殆どなく、強いて云えば弓道部と柔・剣道部とがあるだけで、今日みる人気の野球・サッカー・ラグビー・陸上競技等々のものは思いもよらなかった。

全学年生の編成は、本科六クラス（学年毎に二クラスの編成・一クラス定員約三十名）・高等科三クラス（一クラス定員約二十名）、全学々生数二四〇名前後の小ぢんまりとしたものであった。校舎は各教室の他に二階の奥に講堂があり、時たま教室としても転用されていたが、その広さは全学年生の集会で満杯となった。その他、総長室、教員室、総長室、図書室、協会々長室、同事務室、学院事務室等のあるのは云うまでもないが、ともかく旧い狭い校舎であった。

## ②在学時代の思い出、異色の学級

私が本科へ入学したての頃は、その春に中学を卒えたばかりの十七才の若輩でありました。先輩の方々の中には随分と老齢の人もおられました。学院の廊下などで行き交う度毎に、このお方は果して教授なのか、それとも先輩なのかと見分けのつかず、その瞬間とまどうことも縷々でした。それらの老齢の方々の中には父と子、親子二代揃って在学されていた方々もおられました。

私は昭和四年三月（1932）に、本科三ヶ年の課程を修了し、同年四月に第四期生として高等科へ入りました。この頃の私は世間のことに疎い若冠二十一才の若者でした。たしかこのクラスの中では私が一番の若輩であったと思います。本科在学当時の級友に比べると、このクラスはひとときわ高齢の方が多い上に、勉学の体度も一段と真剣味のただようものでした。このクラスには入学前に已に実社会で活躍し、いろいろと人生経験を積まれた方も多かったです。現在、私の手元にある当時の名簿（昭和七年三月卒業生の人名簿）を抜いてみると、二十六名全員の入学前の職業が明記されている。その中には、小学校訓導、または中学校教諭の職に就いていた者や、これらに準ずる職業の方々が十二名にも及び、この数値は凡そ全クラスの半数近くに及んでます。この他に異色の方としては退役の陸軍歩兵大尉と、海軍大佐の方々がおられました。つまりクラスの大多数の方々は、入学前に已に就職の経験者であり、社会的にも相当の地位を占めておられたわけです。従って級友達の年齢も、老・中・

少とまちまちでした。今日、当時は振り返ってみると、随分と異色の学級だったと思われます。

### ③当時の学習規程と学習風景

(イ) 固定時間割制度の実施 —— 本学院では、本科・高等科を通して学生各自による単位選択制をとらず、学院当局の定めた固定時間割り制度であった。その時間表は午前と午後とに授業はみっちり詰っていた。だから学生によって自由なあき時間と云うものはなかった。当時の学生は終日みっちり学習をつづけたものであった。時たま講師の欠勤等で休講になると、一同はほっとする。凡そ一単位は二時間であったから、休講となると相当な時間的よゆうのあるわけで、私たち学生は久しぶりにゆるゆると過すことが出来た。但、学舎は前に述べたように狭かったし、校舎内には食堂の施設も、休憩所もなかったし、それに図書室も手狭で大勢の者は入れなかったから、学生はそれぞれに空き時間の身の処し方を工夫した。幸せなことに、ここは神田の書店街に近いので、晴れた日にでも当れば、友人と学舎を出て、三三五五古書肆を訪ね歩いた。靖国神社のわきから九段坂をおりると、路の右側に松雲堂書店があった。ここは漢籍専門の店で、私等は先ずここへ立寄るのが常であった。店の主人、野田文之助氏は一角の学者で、この道に明かるい人でした。それで学生は勿論のこと、教授の方々も多数立ち寄っておられた。ここから少し足をのばすと、書道用具のしにせ玉泉堂があった。このあたりをぶらぶらと、ものの七～八分も歩くと書店の数は次第にふえ、やがて神保町の十字路に出る。ここには一誠堂などの大きな店舗が軒を並べ、中心街を形成していた。但、雨の日には困った。じっと教室の内に閉じこもっているより他になかった。学院は住宅街の中に在るので、この附近には殆んど商店らしいものはなく、昼食をとるところも無かった。パン屋さえなかった。だから私等学生の殆どの者は弁当を持参していた。そして昼食は教室でとった。当番に当たった者は湯茶の入った大やかんを階下の用務員室まで取りに行ったものでした。当時の素朴だった学生時代のこ

とがら、今も思い出されてなつかしい。

(ロ) 当時の学習方針 —— 本学創設の目的が「皇道に醇化した儒学の振興と大儒の養成とに在った」から、自ずと授業の内容も漢学が主となり、これに国学古典が加わり、その他、多少の論理学・心理学などの教科が課されていた。その漢学の学習範囲は経・史・子・集の総ての部門にわたり、国学の面では古事記・万葉集・古今集・神皇正統記などを学習した。語学は週に三時間程の中国語を課するに止り、これは中国人の包翰華と云う先生が小型の「官話急就篇」を教科書として教えてくれた。当時はまだ中国語のラヂオ放送も、CDも、その他便利な録音もなかったし、辞書の類もお粗末で、僅かに石山某氏の著作の他、井上翠氏の「支那語辞典」等、わずかに数種あるに過ぎなかった。語学は中国語のみで、英語の学習は高等科に進んでから論理学・心理学等の教材として少々学んだに過ぎなかった。その代り漢詩・漢文の実作には時間をかけて、じっくりと指導された。漢作文は松平康國先生、作詩は國分青崖・田辺碧堂・川田雪山先生方の直接のご指導を受けた。

(ハ) 当時の学習風景 —— 授業の特色として徹底した白文訓読の実力養成があった。その一方、レポート書きや、小論文作成等のことは殆ど奨められなかった。小論文書きの課題は僅かに加藤繁先生からの課題の「五珠錢に就いての研究」がただ一つあったに過ぎなかった。その代り全学年を通じて教材には総て白文のものを用いて指導された。また原文の解釈は古注も総て白文の教材を用いて指導された。また原文の解釈はこれらの白文を読みこなすところから理解した。訓点本や一般の解釈本は極力用いないように勤めた。これによって白文読解力は養はれた。世の中で“大東文化学院の出身者は、原文をよみとく力に勝っている”とおほめの詞を得た所以である。

(ニ) 輪講の授業 —— お互の読解力をつけるのに大いに役立ったものに「輪講」があった。輪講の授業では、先ず担当の教師が一名の生徒を指名する。使命された者は、テキストの原文をよみ上げ、読み終わったら

次は解釈へと移る。これを聞いている級友一同の者は、誤読の箇所や解釈上の意見の相違点があれば、まず挙手して発言を求め、その誤りを指摘する。甲乙の両者は互に己の見解の正しさを主張しあい、甲論乙駁、仲々取捨のつかなく成ることも度々であった。この時、教授は初めて口を開き、甲・乙のいずれが正しいかを、その理由を説いて判定を下す。そこでさしもの論争も取るのであった。

輪講の授業では、発表者を指名するのに韻筒いんとうを用いていた。この韻筒と云うものを今日では知る人も少なくなってしまうが、それは丁度、今日お寺やお社で「おみぐじ」をひく時に振って出す、あの竹筒を創造すればよい。先生は竹筒の中へ、あらかじめ詩韻の一東・二冬・三江などと「しるし」を付けた竹片をいれておき、これを振って、一箇の竹片を取り出し、その番号に当る席次の者が指名されることとなる。幸いに十分に下調べの行き届いている日には、むしろ当ればよいがと願いもするが、これと反対に予習の不十分な日などには甚だしく困惑するものでした。若しも運が悪いと毎回つづいて当るわけで、前回やったからもう当分は安心と云うわけにはいかない。しかしこの韻筒のお陰で、下調べにも自ずと念を入れることとなり、読書の実力も随分と養われたように想われた。

#### ④遠路徒歩通学の楽しみ

当時私は赤坂区（現在の港区）の青山に住んでおりましたが、生来歩き好きの上に、健脚を誇っておりましたので、家から学院までの一時間余の道のりを雨天でもない限り歩いて通いました。当時の青山は今日ほど繁華ではなく、その名のように青々と草木の茂る台地でありました。その町はずれは広大な青山墓地に連なる静かな環境でした。家を出て墓地の一角をかすめるように、ものの七～八分も歩くと、大きなお寺の「梅窓院」の横に出る。この寺の前はいわゆる青山通りで市電（東京市の電車）が走っている。ここからほど近い「青山外苑」を横ぎり権田原から青山御所の裏道を抜けて、～四谷見付～市ヶ谷見付～学院へと歩きつづ

けた。これらの一時間余の長い長い行程も、今日のような車の行きかう騒音の市街地とは異なり、野趣豊かに緑のしたたる静かな途でしたから、自ずと心の安らぎを覚えたものでした。私はこの長い道のを往復する毎に、足の調子に合わせて、好きな唐詩を口ずさんだり、学習中の古文を暗誦したりしたものでした。学院からの帰途、青山に近づく頃は、たいがいもう日の沈む夕方でした。晴天の日には墓地の高台に立つ幾塔かの石碑が夕陽に照らされて、紅くて輝いている。このような光景に接するたびに、私はきまって唐の沈佺期のよんだ「邙山」の七絶を思い浮べて自ずと口ずさんでいた。この詩のうら淋しい雰囲気は誠に青山墓地の趣と相通じあうものでした。この詩は唐詩選に収録されている。次のようです。

北邙山上列墳塋。 万古千秋对洛陽。

城中日夕歌鐘起。 山上惟聞松柏声。

また私は往復の長い道のを歩く時には前述のように、たいがいは当時学習中のものを反復口ずさんでいました。四書の「大学」や「中庸」の全文を暗誦したのもこの往還のお陰でした。

#### ⑤当時の学生気風と服装について

当時の本学院学生募集要項によると、その募集の対象は専ら男性に限られておりました。従って男女の共学が普通となった今日の大学風景とは程遠いものでした。当時の学生の気風はと云えば、それは「質実剛健」の四文字が、びたりとあてはまるかと思われます。

前章に記しましたように、同じく机を並べている級友と云っても、それぞれの年齢は老・壮・少とまちまちでしたし、また当時は制服の制定は一応あったにしても何を着ても自由でしたから各人の服装もまちまちでした。クラスの大多数の者は、経済上からも行動の便利さからも、安価で便利な紺色の学生服を着ていましたが、なかには和服に袴をはいた者達も少くはなかった。私も教練のない日などには和服に袴をはいて登校したものでした。但し服装の自由さにかかわらず、制帽のみは着用が

定められていました。それは各大学並の角帽で帽子の正面には、大東文化を省略した「東文」の二字をデザインした徽章がついていた。

前述のように、級友一同は将来の大儒を志しているだけに、攻学にはひた向きで、いわゆる横路にそれる等と云う者は皆無に近く、日々の行動も自ずと真剣味を帯びていた。時は正に大東亜圏開拓の声高く、国を挙げて満州開拓運動の幕開けであったから、学生の中にも自ずから大東亜圏——満州の大地へ向って雄飛するの大望を抱く者も追々と、その数を増し、これらの青年学徒の中にはいわゆる壮士風の者達もありました。

#### ⑥七十余年前を回顧して

私が本科に入学したのは旧制中学卒業の十七才（大正十五年、1926）の春のことであった。この折り、学級中には、偶然にも母校（日本中学校）を同じくする一年先輩の、河住玄・本居秋津氏の兩人がおり、自然と親しみを覚え、いつしか無二の親友となった。川住君は勉学の士で、常にクラスのトップの座を占め、本居君は剣道四段の勇士ながらも、ひとときわ作詩に優れ、つねに情緒豊かな七絶を賦していた。私はこれらの友から日、夕、好影響を受けたことを今も感謝している。——その後、本科（三年制）より高等科（三年制）へと進み、その全課程を履修し、卒業したのは二十三才（昭和七年、1932）の春のことであった。この年の四月に吉田増蔵（学軒）先生の創立された書原撰述所の四名（解題者補：別に五名との記述もある）の助手中の一人としてご採用いただき、専ら説文（文字学）の研究に入った。終生の益友となった西部文雄（蘇軒）氏との出会いは、ここに始まる。爾来相互に切磋琢磨七十余年にわたり今日に及んでいる。因みに本科卒業時には文部省より中等学校漢文科教員免許証（旧制）を高等科卒業時には高等学校漢文科教員免許証（旧制）を与えられた。この歳より指折り数えれば烏兎忽々として、いつしか歳月は流れ、思い出は七十余年前のことと成ってしまった。共に学窓を去った数十名の旧友も、一人二人といつしか先を急いで道山に帰して

しまった。今は共に語る旧友もない。夜半灯下に筆を執れば、ただ孤影悄然たるを覚ゆ。

## (二) 本学の特色と「学生募集の状況」

①本学院では入学金・授業料を一切とらぬこと。

②給費制度の確立 —— この実施の状況については……学生一人ひとりの学業成績と、生活経済状態を勘案し、その必要と認められた者に対して手厚い給費が支給されていた。当時の学生はこの恩恵に浴した。そしてこのお陰で無理なアルバイトに走ることなく、安んじて勉学へ打ち込むことができたのであった。高等科への入学資格は、前述のように漢文科中等教員免許状の所有者と定められていたから、第一・二期の高等科入学者の多くは、何等かの現職を辞してまでの転向者で満ちていた。その中には妻子を郷里に残し、一意発奮、本学院の門を叩いた者も少なくない。それらの方々の中には前に述べたように中等学校教諭の現職を辞してまでの入学者もあった。私の及聞したところによると、現職を辞して来られた方々には従来の在任中に受けていたものと、ほぼ同額の給費が支給されたとのことである。因みに当時中等学校教員の初任給は凡そ五十―六十円程度であったろうから、入学して成績の優秀な者には、その人の在職中に受けていたのと、ほぼ近い額の給費が支給されていたものと思われる。そして学生等はこの一大恩典に浴して後顧の憂なく学究の道へと突き進むことが出来たのであった。本科生に対する給費の学は高等科生に比べると遥かに低いものではあったが、それは凡そ月々一〇円乃至三〇円の間であったと思われる。当時の貨幣価値は現在の相場に換算すると、どの位になるか? の一例として私の体験を挙げてみよう。→私は高等科を卒業の年（昭和七年三月、1932）に吉田学軒先生ご開設の「書原撰述所」の助手に採用され、同輩の助手三名とともに月額五十円の報酬を受けた。私はこの撰述所にほど近い処に下宿したが、ここは和室の六畳のひとまに、朝夕のまかない付きで、月額二十三円五十銭の



支払いですんだ。だから残余の金子で十分に書籍も購入し多少の余裕もあったことを思い出します。この体験を通してみると、当時の五十円の給費は、凡そ現在の四十万円前後にも相当するのではなからうか。当時の学生等はこの恩典に浴し、無理なアルバイトに走る必要もなかった。おちついて攻学の道にいそしめたのであった。

### ③卒業後の資格付与

1. 本科の卒業生には中等学校（旧制）漢文科教員免許状無試験検定の資格が与えられた。
2. 高等科卒業生には高等学校（旧制）漢文科教員免許状無試験検定の資格が与えられた。

### ④学院創立のよろこびと、学生募集状況

大正十三年の春、大東文化学院はいよいよ開校の運びにこぎつけ、高等科生、並に本科生募集の広告を發表した。このニュースは忽ちに日本全土に広まり、受験希望者は津々浦々より集った。今、この受験学生応募の状況を大東文化学院要覧（昭和八年十二月学院発行）についてみると、次のように記されている。

本科合格者、七十三名に対して応募者は四四五名

高等科合格者、三十三名に対して応募者は六十八名

とある。誠に激しい競争率であった。今日に残るこのような記録からみても合格することは仲々容易なことではなかったことが伺える。

### ⑤学級編成と教授陣々容

次に開校当時の学級編成は如何だったかとたずねてみるに、本科二組、高等科一組、計三組に過ぎない。そして学生数は全部併せて100余名にすぎない。こじんまりしたものであった。これにひきかえて教授陣容は誠に充実したものであった。当代の名だたる碩学鴻儒を招聘し、その陣容は実に充実したものであった。

第一代総長には平沼騏一郎先生をいただき、

教授・教務管理に、牧野謙次郎先生

教授・教頭に、松平康國先生 が当たられた。

そして、ここに充実した教授陣容をととのえて、その第一歩を踏み出したのであった。

### (三) 本学院創設の理由と、暗澹たる当時の世相

#### ①本学院創立の理由と、その使命

私が入学した昭和の初め頃の世相を振り返ってみると、それは世を挙げて欧化し、また一方に於いては赤化思想の台頭も危惧されてもいた。当時国家の衝に当る有識者はこれらの思想の蔓延するを恐れていた。本学院の設立には或はこれらの外来思想の蔓延を危惧し、これを阻止するの防波堤の役割を意図したものであったかも知れない。いずれにもせよ、本学院の設立に当っては巨額の国家予算を計上し、向後十ヶ年の継続事業として発足をみたものであった。その建学の精神とは已に前述したように「皇道に醇化する儒教の振興と、将来大儒の後継者たりうる人材の育成」を目的に掲げたもので、これは嘗て明治時代に開所された「古典講習所」の設立の精神と相似たものと云えようか。またこの設立の精神は無窮会東洋文化研究所の指向する精神とも軌を同じくするものであった。

創立当時の本学院の教育内容と方法とは已設の大学や教員養成所とは大いに異なるものがあった。例えば私の兩名の弟たちは、共に國學院大学に学んだが、ここは予科二ヶ年と学部三ヶ年から成り、つまり五ヶ年で卒業できた。これにひきかえて大東文化学院は、本科・高等科を併せて六ヶ年となるのに、わざわざ私立の専門学校としての形式をとった。即ち大学ではなく、卒業しても学士の称号は与えられない。このような建前をとったのも、他の官・私大学では果たし得ない何物かをねらったのであったろう。

#### ②暗澹たる当時の世相を省みて

大正時代も中頃になると内憂外患相ついで起り、世相は暗澹たるもの

が有りました。先ず大正十年（1921）には、首相の原敬氏は東京駅頭で凶漢中岡良一に刺殺され、内閣の総辞職をみた。同十一年にはワシントン条約に縛られて、我国は戦艦尾張以下七艘の建造中止に追い込まれ、ついで同十二年九月には、いわゆる関東大震災に見舞われて、帝都の大半は灰燼に帰し、死者九万一千人余、行方不明者四万二千人余と称せられた。これは誠に痛ましい天災でした。当時私達の家は東京市牛込区富久町（現在の新宿区富久町）に在った。そして私は旧制中学の三年生でした。その日は第二学期の始業式を終えて自宅へ戻り、ひと休みしていると、間もなくこの大地震に見舞われたのです。グラッと来た時は家の廊下を歩いていたが、思わずも立ち止まり、天井の落ちてくるのを防ごうと、必死になって両手を伸ばし頭の上の「カモイ」を力の限り押し上げていました。幸いに家はつぶれもせず、壁のはげおちる程度で事なきを得たのですが、ホッとしながら庭先をみると、石の灯籠は倒れて、三つ四つに分解されている。門前の電柱は斜めに傾き、長い電線はなおも大きく左右にゆれていた。やがて気分もおちつき平生に返ってみると、両手でしっかりと「カモイ」を支えていた自分の行動が、いかにも馬鹿げたものに思われた。いかに支えたとして、支えきれぬわけのものではない。……あのとっさの場合に取った己の行動を振り返り自嘲せずにはおられなかった。但しこのような、とっさの場合には誰しも平生の冷静さを失い、思わぬ行動に出るものなのかも知れない。この大正の大地震の恐ろしさは、八十年後の今でも忘れられない。この大地震の発生は正午近くであった。やがて火の手は帝都の各処からいっせいにあがった。そして夜に入るに従って、街から街へと蔓延した。その後とも絶え間なくおこる余震を避けて、多くの人達は自宅を離れ、空地にゴザなどを敷いて幾夜かを過ごした。私達一家も近くの寺の境内に避難しましたが、水道も瓦斯も止まったので、町々はどこまでも暗く、夜分は真に文字通りの暗黒の世界と化してしまった。空を見上げると下町方面は火煙を反映して紅く染っていました。古来恐ろしいものの「たとえ」に、「地震・

雷・火事・おやじ」と云われているが、このトップにあげられた地震のこわさは、また格別です。

この大正の大震災の年の十一月には国民精神作興に関する詔書が發布され、同十四年（1925）三月には治安維持法が議会を通過し、その一方、同五月には高田・豊橋・岡山・久留米の四個師団が廃止となり、日本には世界軍縮会議でのしわよせが迫り、次第に締めつけられていた。当時のこの暗澹たる世相の中、国家は赤化思想の防衛にも迫られた。この防衛の一手段としてであろうか、この頃より中等学校並びに大学に現役将校を配属し、全男子学徒を対象に軍事教練を実施した。これは一つには軍縮にともなう余剰の人材の活用策でもあり、また全国民に対して、国家防衛の意識を涵養するが目的であったと思われる。その後の私の長い教員生活の体験からすると、中等学校には尉官を、大学等上級学校には佐官を派遣したようであった。世の中は総じて軍部優先の時代であったし、私の接した幾多の配属将校の中には、軍部の威を借りて、高圧的に出で、自己の主張を貫き通し、まま民間人を見下すていのひともまま見受けられた。このような幾たりかの教官の中にあつて、私は真に人間味豊かな教官にも出会い、心より信頼し、尊敬する方々にもあつた。そのお一人に竹下幾太郎少佐殿がおられた。章を改めて思い出を記したい。

兎にも角にも当時の世相は次第に軍国の一色と化し、国を挙げての国土防衛、赤化思想抑圧の時代であったから、平和自由思想を機軸とする平和憲法化の今日からみると、現代の人々の想像もできない酷しい世相であった。当時のこのような世相の中にあつて、大東文化学院は国会の上下議員満場一致の賛同を得て創設された。成立に当っては莫大なる国家予算を計上し、向後十ヶ年間の継続事業とした。つまり十年の後には予算を打ち切り廃校とする計画であった。このような学院創設の歴史からみても本学院の創設は、大儒の後継者を養成するの目的と、ともにまた暗々裏に赤化思想防衛の一助としてでもあつただろうかと推察される。またこの期限を限定しながら碩儒の後継者を育成しようとした有り

方は、嘗て明治年代に設けられた「古典科」と、ややその趣きを同じくするものと思われてならない。

#### (四) 痛ましい学院紛争に想う

##### ①紛争の発生と、その成り行き

私が入学した頃は学園紛争の真ただ中でした。初代総長の平沼騏一郎先生は鋭意育英に尽疲されたが、惜しい哉、先生はご在職僅か二年にして枢密院副議長の要職に補され、この為に辞職なされた。その後任には東大教授文博井上哲次郎先生が二代目総長として就任された。その後いくばくもなくして紛争が起った。この私の入学の年に私学派（早稲田系が中心）の先生方が一斉に退職し、その後に官学系の人たちがごそと入って来られた。このような次第にて初めの一ヶ年程は私学派の先生の授業を受けたが、その後は官学系の人たちに習った。当時一般の学生の風潮も、どちらかと云えば官学系の先生を歓迎したきらいがあった。それと云うのも当時はひどい就職難時代であった。いくら欲のない漢学々修の徒とは云っても、矢張り就職に有利な方に傾くのは自然の流れと云うものであった。

当時全国の公立中等学校の教諭のポストを握っていたのは云うまでもなく官学側であったから、この側につくのが有利なわけであった。殊に当時の世相は不況のどん底に在って、大学を出たとて仲々就職の出来ない実状で「大学は出たけれど」と云った流行語の生まれた時代でもあった。

##### ②学院紛争の遠因

この紛争の遠因を尋ねてみるに、それは学院創立以前に已に胚胎していたものと察せられる。開校当初の教授陣々容は私学派教授を中心に結成されたが、この結成をみるに到るまでの道のりは決して平坦なものではなく、仲々に複雑な、そして紆余曲折を辿っている。その経緯を尋ねてみると、開校に至る数年前から、京都帝国大学・東京帝国大学・私学

派と、これら三派からの代表の方々が、「学院綱領」並に「学則編成」等の基本問題対策委員会を設けて、慎重審議されている。当年出席された方々の所属する大学名とご芳名とは次のようである。

東大系 服部宇之吉  
市村賛次郎  
京大系 狩野直喜  
内藤虎次郎（湖南）  
長尾楨太郎（雨山）  
私学派 牧野謙次郎（藻洲）  
内田周平（遠湖）  
松平康國（天行）

### ③官私三派の合議による教授陣々容の決定

右記の官私三者合議の結果は前述のように新設の学院の教授陣々容は私学派に委ねられることとなったのであった。この三者の協議の成り行きと、決定に至るまでの経緯を記したものに、京大教授狩野博士の詞がある、大いに参考となるので左に記しておこう。

“東西両大学に各々漢文科あり、而て更に一学院を創設せんとするものは、之に由りて両大学の為す能はざる所を為さしめんとするのみ。近代式円満なる学者は両大学に於て既に之を養へり。我等の学院に望む所は、漢学以外何事をも知らざる片輪、しかし漢学に就いては充分なる読書力ありて、経子に通じ、詩文を善くする者是なり”と。

創立の際、学科目制定委員会に於いて、主として私学案と京大案とを用いて、東大市村案の用いられざりし者は、学院建学の根本精神に於て相容れざる所ありたればなり云々とある。（大東文化学院要覧＜昭和八年十二月刊＞の巻末付載、「大東文化学院学生同盟休校に就て天下公明の諸公へ訴」の第二十三頁に記載記事）

右の会議の結果は、この京都大学狩野博士の意見に賛同し、新設の大

東文化学院の教育指導の一般は、私学派の手にゆだねられたのであった。右説の趣旨に従って学院の経営は私学の手により大正十三年に首尾よく開校にこぎつけた。

#### (五) 重ねて「学院紛争の真因」を探る

##### ①初代総長平沼騏一郎先生突然のご転任のこと。

先生は大正十二年（1923）九月から大東文化学院の初代総長にご就任なさった。全職員は総長の下、一丸となって鋭意育英に尽していたのであったが、惜い哉、ご在職僅か一年半にして枢密院副議長の要職に補され、総長の職を辞された。その後任には東京帝国大学教授井上哲次郎先生が就任なされた。井上先生はご就任後、いくばくもなくして大東文化協会と一体となって、官学派の人々を多数教授に迎え入れた。ここに官・私の教授間に対立を生じ、やがて両者間の亀裂は増大し、遂に学生運動勃発への火種となったと云われている。

この亀裂は日を追うごとに増大し、互に甲論乙駁、止るところを知らず、遂に一般学生をも巻き込んでの同盟休校という最悪の事態を招くに至った。やがて井上総長は、いわゆる筆禍事件によって退任に追い込まれ、その後任に大島健一氏が総長事務取扱いにご就任なされたが、なおも紛糾は依然としてつづいた。このころ学院幹事の三塩熊太氏は「大東文化学院紛擾の真相」なる文書を発表するなどのことがあって、その後数年は、総長の就任と辞任とを繰り返し、学院の紛争はなおも絶えなかった。三塩氏の記事は「昭和八年十二月刊の大東文化学院要覧」に掲載されている。全十四章から成り、誠に長文なものである。今、ここには、その題名と項目とを紹介するに止めたい。次のようである。

##### ②大東文化学院幹事三塩熊太氏の主張

「大東文化学院学生同盟休校に就て 敢て天下公明の諸公に訴う」

元大東文化学院幹事 三塩熊太

一、大東文化学院建学の使途を憂いて

- 二. 学生の暴挙と東洋道徳の破滅
- 三. 紛擾の直接原因
- 四. 上野・相良両氏の就任事情
- 五. 川田学生監の排斥
- 六. 合同の経過
- 七. 近藤・内藤二氏の心事
- 八. 北・田中氏の行動
- 九. 協会幹事の躍起
- 十. 学生背後の黒頭巾
- 十一. 建学の事情
- 十二. 建学精神
- 十三. 学院の悪化と鶴沢総長の責任
- 十四. 結論

○この後、鶴沢総長の引退とともに上野・相良の両氏は辞任し、近藤・内藤の両氏が助教授として活躍するなど、暫し事情は混沌をきわめた。

○なお、学園紛争の詳細を記したものには、『大東文化大学五十年史』の第二編「大東文化学院時代」の第三節「学園紛争」の記事があり、(一)「騒動略記」の表題の下に(1)第一回騒動(大正十五. 四～十)、(2)第二回騒動(昭和三. 七～十一)と詳述されている。(昭和四十八年四月、角川書店刊)

③当時の私学派・官学派、両氏の先生方のご芳名

A 退陣された私学派の先生方 (順不同、敬称略) 昭和元年

牧野謙次郎 (藻洲)

松平康国 (破天荒)

内田周平 (遠湖)

川合孝太郎 (槃山)



池田四郎次郎（蘆洲）

今泉定助

佐伯有義

館森万平（袖海）

国分高胤（青崖）

加藤虎之亮（天溯）

松本洪

川田瑞穂（雪山）

佐藤仁之助

岡崎壮太郎（春石）

渡俊治

高塚錠二

今井彦三郎

B 残留、並に新任された官学派の先生方のご芳名（昭和元年より同七年までの間）

諸橋轍次（止軒）

内野台嶺

峯間信吉

加藤繁

前川三郎

平野彦次郎

山内惇吉

植木直一郎

飯島忠夫

竹田復

近藤正治

熊坂圭三

清水澄

岩橋遵成  
内堀維文  
田中逸平  
深作安文  
石田羊一郎  
井上哲次郎  
服部宇之吉  
宮原民平  
松本愛重  
島田鈞一  
金子元臣  
岡田正之  
木野村政徳  
塩谷温  
吉田静致  
市村瓊次郎  
遠藤隆吉  
久保得二  
小柳司気太  
古城貞吉  
見尾勝馬  
神田喜一郎

C 官・私交替の前後期を通してご勤務の先生方、ご芳名

安井小太郎（朴堂）

山田準（濟齋）

那智佐典

金子元臣

清水澄

吉田増蔵

包翰華

中山博道

北吟吉

大槻豊

D なお当時（私学派の引退後）、高等科第一・第二期の卒業生で助教授に抜擢された方々に次の方がある。

近藤空

(ママ)  
内藤 内藤政太郎か（解題者補）

鈴木由次郎

岡村利平

E 私学系の先生方と行動を共にして退学された方に左の方々があった。

上野賢知

相良政雄

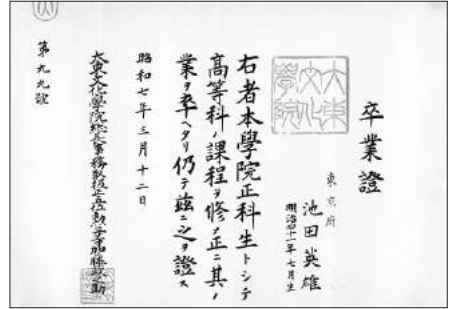
清田清

他、数名

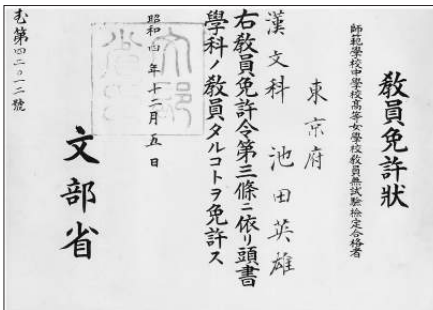
これら D、E、に挙げた方々は選抜の道こそ異にするものの、いずれの方も優れた一角の学者であった。上野賢知氏は「左伝」の研究家で、同書に関する古今の諸版本、並に研究書を輯集網羅し、左伝に関する好著を刊行しており、加藤虎之亮先生に従って久しく武蔵高等学校（旧制）の教授をつとめ、また無窮会の重鎮でもあった。次に近藤空氏は、中国文学の面に暁通しておられ、大東文化学院教授の職に在りながら昭和十一年（1936）には大著「支那学芸大辞彙」を立命館から出版されている。この種のものには類書もなく氏の古今独歩の開拓であり価値が高い。後にご令息の春雄氏は大東文化学院に学ばれ、後にご父君の衣鉢を継いで、父君を凌駕する大著「中国学芸大辞典」を大修館書店より昭和五十三年（1978）に刊行されている。



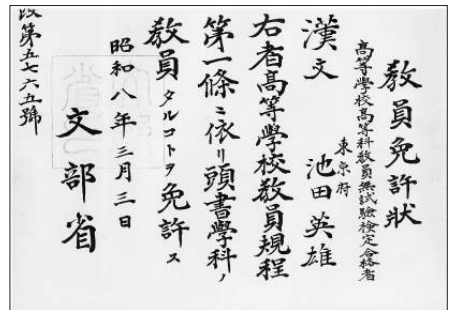
資料1 本科卒業証



資料2 高等科卒業証



資料3 教員免許状  
(中学校教員無試験検定合格者)



資料4 教員免許状  
(高等学校教員無試験検定合格者)



資料5 本科卒業記念写真 (□の左から3番目が池田英雄)

## **Hideo IKEDA's "Shugaku no Dojo Kaisoroku - Nanajunen Mae no Omoide no Ito wo Tagurite" (Recalling a Hall of Learning - A Memory of Daito Bunka Gakuin 70 Years Ago)-How a Student Saw the "Daito Bunka Gakuin Dispute"**

Nina Asanuma

This paper introduces a memoir by Hideo IKEDA, who completed Daito graduate school in 1932.

His father, Sirojiro IKEDA, was a professor at Daito Bunka Gakuin, and a well-known scholar of Chinese classics (Sinology). Sirojiro resigned in 1926, to protest against the ongoing "Daito Bunka Gakuin Dispute" of the 1920s. At that time, Hideo was studying at Daito Bunka Gakuin and thus witnessed his father's resignation along with many details of the "dispute".

Hideo IKEDA's memoir sheds new light on one of the most important moments of our school history.